

「償い」を問う

——「水俣病」と石牟礼道子『苦海浄土』の半世紀——

金井 景子

（一）はじめに

二〇〇四年四月、『苦海浄土』は完結した¹。一九六〇年一月に、石牟礼道子が「奇病」と題する「水俣湾漁民のルポルタージュ²」を発表してから、半世紀近い年月が費やされたことになる。そしてこの半世紀は、一九五六年五月に水俣病の発生が「公式確認³」され、不知火海の沿岸漁民を中心に患者が激増し、患者と家族、支援者による当該企業と行政に対する抗議運動が起り、さまざまな裁判が闘われ、水俣病の病像と償いの形が問われ続けた歳月とほぼ重なり合うものでもあった。

原稿用紙に換算して二二〇〇枚をゆうに超える長編『苦海浄土』を書き次ぐ中で、主婦・石牟礼道子は作家になり、ときとして運動家になった。作家が運動したのでも、運動家が著作物をものしたのでもなく、『苦海浄土』という傑出した稀有な作品が、彼女を作家にし、運

動家にしたと言い換えてもよい。

末尾の注¹に記したように、『苦海浄土』三部作の完結は、『石牟礼道子全集』の開始とも重なっていた。つまり、全集収録のために決定版として改稿された『苦海浄土』が収録された第二巻と第三巻が配本の皮切りになって、全十七巻および別巻が配本されることになったのである。『苦海浄土』が書き上げられることによって、石牟礼道子の著作の全体像もまた読者の前に提示されようとしている⁴。

つまり、水俣病をめぐる大きな歴史的展開の中で、患者救済運動の一翼を担う役割も果たしてきた『苦海浄土』が、その世界をようやく完結させ作品として自立したことが、全集刊行という石牟礼文学総体を提示する試みの船出とも重なっている——二〇〇〇年代に『苦海浄土』を考えると、わたしたちはそのような環境でこの作品に對峙することになっている。私自身は、全集刊行と重ねられた『苦海浄土』の完成を、「檄文から叙事詩への転換」という枠組みで捉える構想を

もっているが、これについてはまた、改めて他稿を期することとする。本稿は、全貌を現した『苦海浄土』を対象に、本作品全体を貫くテーマの一つであると考えられる「償い」の在り方を問うことが、どのように表象されているかを洗い出すことを目的にしている。その際、着目するのは、『苦海浄土』において「私」「わたし」「わたくし」として現れる著者・石牟礼道子を思わせる語り手と患者およびその家族との位置関係がどのように描かれ変容していくかという点である。

『苦海浄土』に対する初期の先行研究として、本稿の指向性に照らして重要な役割を果たしていると考えられるのは、一九八二年に刊行された羽生康二『近代への呪術師・石牟礼道子』（雄山閣）と一九八六年の新井豊美『苦海浄土の世界』（れんが書房新社）である。『近代への呪術師・石牟礼道子』においては、『苦海浄土』の患者とその家族からの「きき書き」に焦点化してイメージの形成や比喩表現、表現主体としての民衆像、語りの様態について分析し、散文としての比喩ない訴求力を評価している。『苦海浄土の世界』では、「水俣病」に遭遇した石牟礼道子とその体験をいかに思想化していくかについての道程が辿られ、石牟礼が観念の言葉の抽象性や論理の言葉の合理性に懐疑的な立脚点を形成し得た論拠に「女性性」の指摘を行っている。いずれの著書においても、主な分析対象とされたのは一九六九年に刊行された『苦海浄土』（完成版の第一部に相当するテキスト、講談社）のうちの「ゆき女きき書き」「天の魚」の章である。八〇年代までには、一九七四年に『天の魚』（完成版の第三部の原型にあたるテキスト

ト、筑摩書房）が刊行され、第二部の基層を成すことになる連載も『辺境』において開始されていたが、それぞれの論は第一部の「きき書き」の文体を中心に扱っている。

この、『苦海浄土』評価の中心を、石牟礼独自の「きき書き」文体に集約する傾向は、その後の研究史においても踏襲されている。井上洋子「ゆき女きき書き」成立考——石牟礼道子とフェミニズム——、黒古一夫「〈共苦〉の思想と文学——水俣病と石牟礼道子」、川村湊「風を読む 水に書く」潮の橋の上で——石牟礼道子論」、木村信子「時間軸を超えて——石牟礼道子とジュリア・クリステヴァ」、岩淵宏子「表象としての〈水俣病〉——石牟礼道子の世界」——、矢倉真宏「ルポルタージュからノンフィクションへ——石牟礼道子『苦海浄土』をその原点として——」いずれにおいても、『苦海浄土』の文学的評価としては「きき書き」文体の創出に論が集中しているのである。

『苦海浄土』の全容が明らかになった現在、成すべきことは、作品全体の出版期に異彩を放って提示されたこの「きき書き」文体が、その後どのような役割を果たしつつ変容していったのかを見届けること、そしてその後に導入されたさまざまな手法を併置して比較検討を重ねつつ、「きき書き」文体の評価だけで『苦海浄土』を語り終わらぬ、新たな歩みを始めることであると私は考えている。

本稿においては、第一部の「きき書き」文体創出の前後から第三部に至る過程で、語られる対象だった患者とその家族たちが、語る主体

へと変容していく道程を、「償い」をキーコンセプトに跡付けて行く。

(11)「償い」をめぐる歩み

――二〇〇九年に「水俣病」を考えるということ――

石牟礼道子がかつて「水俣病問題」について、つぎのように明快な自問自答をしてみせたことがある。

水俣病問題の核心とは何か。金もうけのために人を殺したものは、それ相応のつぐないをせねばならぬ。ただそれだけである。親兄弟を殺され、いたいけなむすこ・むすめを胎児性水俣病という業病につきおとされたものたちは、そのつぐないをカタキであるチッソ資本からはっきりとうけとらねば、この世は闇である。水俣病は、「私人」としての日本生活大衆、しかも底辺の漁民共同体に対してくわえられた、「私人」としての日本独占資本の暴行である。血債はかならず返済されねばならない。これは政府・司法機関が口を出す領域ではない。〔絶対負荷をになうひとびとに〕

とはいえ、こう書いた石牟礼自身も痛感していただろうが、水俣病が戦後日本で起こった未曾有の規模の長期間にわたる「公害病」であったがゆえに、「それ相応のつぐない」とは、当該企業に対する監督責任のある、国や県といった行政機関の責任をも問わずにはおかないものであった。現実問題として、石牟礼がこの文章を発表するまでに、

「償い」を問う（金井）

チッソが自主的に行ってきた「償い」は、後に触れる一九五九年の「見舞金契約」に集約されるような、引き伸ばしの果てに拙速に行われる、交渉の余地のない一方的なものであり、驚くほど不十分で、患者とその家族を落胆させ続けるものであった。同時に「水俣病問題」について行政機関が示した判断や斡旋のための施策は、一貫して加害企業のチッソ寄りのものであった。また、「償い」が実施される直前には、苦しい戦いを共に戦ってきた患者とその家族、そして彼らを支える支援者たちが、提示された「償い」の内容で妥協するかどうかという判断を踏絵のように迫られるために、分断や対立を余儀なくされた。

ここで、水俣病の発生が公式確認された一九五六年以降、何らかの「償い」を提示して「水俣病問題」を終結させようとするさまざまな動きを整理しておこう。

まずその一つ目は、一九五九年に当該企業である新日本窒素株式会社と患者互助会の間で締結された「見舞金契約」である。この契約は、死者三〇万円、葬祭料二万円、生存患者年金一〇万円、未成年者三万円という、当時の貨幣価値に照らしても極めて低額である見舞金を、「今後、原因が工場廃水とわかって追加補償しない」という条件を患者や家族に飲ませることで支給するという驚くべきものであった。それは一九七三年に、熊本地方裁判所がこの「見舞金契約」を無効とする判決を言い渡した際に、「公序良俗に反するものであった」と指摘するほどのものであった。受諾した患者たちはこの後、長く不当な

沈黙を強いられることとなる。

二つ目は、一九七〇年の厚生省の斡旋による補償処理である。これは患者の生存者に八〇万円から二〇〇万円の一時金および年金一七万円から三八万円を支給するといったものであったが、チッソの責任に触れていないという点で、患者およびその家族たちを、調印する者とこれを拒否して新たに訴訟を起こす者とに分断し、対立させる結果を招いた。

三つ目は、一九九五年に提示された政府の最終解決案である。水俣病の症状を発症しながらも、水俣病認定基準に達しないとして補償の対象外にあった未認定患者に対して、裁判や認定申請の取り下げを条件に、二六〇万円の一時金と「保険手帳」といった形で医療費などの支給が行われるというものである。翌一九九六年に、それまで認定基準に阻まれて一切の補償を受けることが出来なかった一〇三五三人が、この案を呑んで和解に応じた。しかし、故郷・水俣を離れて関西に移住し、水俣病を発病して認定を求めている五八人は、この和解に応じることなく、裁判Ⅱ「水俣病関西訴訟」を続ける道を選ぶ。

この水俣病関西訴訟の最高裁判決は、二〇〇四年一〇月に出され、患者認定制度の基準についての国と熊本県の責任が一部確定した。この判決以降、水俣病認定申請を行う人が急増した。熊本県の水俣病認定審査関連統計資料に基づき、一九九七年から二〇〇〇年にかけて水俣病の認定申請者数を経年的に開示している相思社のデータによれば、二〇〇三年には八名だった申請者数が、二〇〇四年には七四六名、二

〇〇五年には一九九名と急増し、二〇〇八年における累計の未処分者数は三七八三名に上った。看過すべきでないのは、その八五％が初めての認定申請、また政治的和解で「保健手帳」の給付を受けた患者一〇〇名以上がそれを返上して改めて認定申請に踏み切るという事態が孕まれていることである。

認定患者二六五人（死亡者含む）に加えて、今後、どのくらいの認定患者数になるのか、誰にも予想がつかない事態のさなか、五つ目の救済案として二〇〇九年七月に国会で可決されたのが、「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」である。二〇〇四年以後、熊本・鹿児島両県を中心にして三〇、〇〇〇人に急増したといわれる救済希望者のうち、二〇、〇〇〇人が対象になると見込まれる。これまでの手先や足先のしびれのほか全身性感覚障害、口の周りの触覚・痛覚障害などの症状を持つ患者が新たな救済対象となるが、感覚障害のない胎児性の患者が対象から洩れることに加え、これまで何らかの保障を得ている対象者は除外の対象とされており、また最も懸念されているのは、特措法に盛り込まれた当該企業であるチッソの分社化が盛り込まれている点である。補償金支払い後に親会社を清算し、子会社を存続するという構想は、親会社の消滅後に新たな被害申請が出された場合の責任主体を曖昧化するという問題性を含んでいる。同法には水俣病の総体を把握するための地域健康調査という基本的な作業の必要性も盛り込まれておらず、課題は山積しているのが現状である。

これらが意味するのは、一九九五年の政府の最終解決策も、二〇〇九年の水俣病特措法も、実は水俣病問題の終着点たり得ていないということである。つまり、政府解決策の時点においてなお救済を名乗り出られなかった潜在患者が多く存在しており、また和解に応じた患者たちに約束された医療保障の内容が不十分であるという現実と、それに対して再び提示されている新法も本格施行前から根本的な解決を指さない暫定的なものであることが浮かび上がったのである。これらを踏まえて言うならば、二〇〇九年の現時点においてなお、「水俣病」は終わっていない。そして、「償い」は問われ続けている。

『苦海浄土』で中心的に描かれているのは、一九五〇年代前半から一九七〇年代後半の約三〇年間——すなわち、水俣病の原因がまだチッソの排水であると確定される以前から、一九七三年に熊本地裁で水俣病裁判の判決（患者側の勝訴）が出た後、川本輝夫らの患者グループが、チッソに対して「水俣で最後まで水俣病に関する責任をとること」と「患者の療養を生涯保障すること」を要求項目に掲げて直接交渉を展開するところまでを対象にしている。しかし、作品をつぶさにひもとけば、水俣にチッソの創業者・野口^{じょうん}遵が化学工場を建設した一九〇八年以降の水俣の歴史や、不知火海を挟んだ天草から漁民たちが移住してくる明治時代の状況などにも言及がなされている。これらのことは、石牟礼道子が二〇世紀全体の流れを踏まえて、『苦海浄土』を執筆していたことを意味する。

また、作品で描かれる場所は、水俣を楕円の一つの中心とすれば、

「償い」を問う（金井）

もう一方の中心に東京が据えられている。患者や家族が通う大病院や裁判所のある熊本、彼らが位牌を携え巡礼姿で参列した、チッソの株主総会が開催された大阪も、重要な舞台として登場している。

こうした空間配置は、「水俣病問題」を真に捉えるためには、病気の発生した時期と地域だけを限定的に取り扱うだけでは不十分である、という石牟礼の立場を明確に現している。西欧に遅れて近代化の路線を歩みながらも、急激な加速によって、戦前・戦後ともに経済発展を遂げた日本——チッソの、人命よりも産業効率を優先する企業の体質と、それを容認し続ける行政の在り方は、まぎれもなく日本の近代化を象徴するものであった。また、奇跡的な経済発展の背景には、地方の農・漁・山村が労働力をはじめとする資源を徹底的に収奪された過程があった。そのことを有機的に捉えるには、中央集権によって権力と資本とが一極集中したメガロポリス・東京と地方との関係を、見据えていく必要がある。石牟礼は、患者宅を訪ねるために水俣の漁村をつぶさに歩き、後に熊本、大阪、そして東京へと向かわざるを得なかった患者と家族に随行（一九七一年一月から七三年七月までの一年半は、東京チッソ本社の前に座り込み）することで、これらを観念論としてではなく、身体感覚を通して確かめ、綴ることになったのである。

『苦海浄土』は、「終らない」水俣病の現状と響き合うように、改めて大きな問いを読者に投げかけた。すなわち、「償い」自体を問うこと——作品においては第二部以後、この病に斃れ傷ついた人々が「償

い」を求めて行動を起し、法に解決の全てを委ねることなく、当該企業や社会、そして自分たち自身に、何が至当な「償い」であるかを問い続ける。どこかに正答があるわけではない、この問いを、問い続けることによって、いまを生きるわたしたちに、近代の負の遺産としての「水俣病問題」を記憶させようとしているのである。

（三）「問わず語り」をする患者像

——『苦海浄土』（第一部）の企み——

『苦海浄土』は、九州の水俣地方で「奇病」が発生していること、その原因が、病気発生以後も垂れ流れ続け、チッソの排水であることを全国に知らせるべく書き始められた。そして、海の汚染によって漁業という生活の基盤をまるごと失い、家族の構成員のほとんどが発病するという過酷な状況に置かれた、患者や家族の声なき声を代行するために書き継がれた。と同時に、日本の近代化の原動力の一つであった企業の論理とはいかなるものであり、国や地方自治体がそれと如何に療着していたかを告発する側面をも兼ね備えていた。

しかし、わたしたちが決して見逃してはならないのは、『苦海浄土』が「水俣病問題」を社会正義の視点から描くドキュメンタリーではなく、同作品の第一部が刊行されたときのサブ・タイトル「わが水俣病」に象徴的に表されているように、水俣病を「わたくしごと」として捉え、患者と家族に寄り添い、その「償い」を求める遙かな道程を、今日にいたるまで歩き通して描かれた文学作品であるという点である。

第一部が文庫版になる際に、石牟礼は「あとがき」で、

白状すればこの作品は、誰よりも自分自身に語り聞かせる、浄瑠璃のごときものである。

と記している。また、『苦海浄土』全編の中で、幾度も自身や支援者たちを「黒子」になぞらえている。後年、俳優の砂田明が『苦海浄土』第一部の「天の魚」の章を、患者の老人の語りに焦点化して、本文にかなり忠実な一人芝居にし、全国を巡回して高い評価を得たが、まさにこれは『苦海浄土』が「語り物」の芸能作品として成立している証左となろう。また、近年では『苦海浄土』を「本来ヴァーバル・パフォーマンスとしてのテキストであったように思える」「何らかのパフォーマンスをしなければ沈黙したままになる楽曲のような本」（慶田勝彦「水俣の民族的近代——「聞き届けられた声」の行方」）、との評価もある。私自身も、この作品の口承文芸と呼んでいい魅力にとり憑かれて、第一部の「ゆき女き書き」の部分を中心にして脚本を作成し、二〇〇三年から国内外で朗読のパフォーマンス公演を重ねてきた¹⁵。

『苦海浄土』は、近代小説とはまったく異なる、近世の人形浄瑠璃あるいは中世にまでさかのぼる古浄瑠璃の語りに彩られている。中でも、患者の「きき書き」の部分は、芸能用語でいうところの「口説き」（曲の中心となり、最もしんみりとして振りも十分に見せ、唄を聞かせる部分のこと）や「触り」（曲中の聞かせ所）に該当する。臓腑をえぐるような怒りや悲しみを伏在させつつも、語るうちに、不知火海の恵みを存分に受けた漁師としての日々、貧しいながらも家族や村人

たちと勞わり合い、誇りをもって生きてきた日々が甦る。しかし、『苦海浄土』を社会派のルポルタージュとして受け取ろうとする人々にとっては、この文芸的な「聞き書き」部分は、その量や質の点から言って、「水俣病問題」を告発する書としては過剰で逸脱したものと見て受け取られた。『苦海浄土』の第一部は、講談社から刊行されたが、それ以前に、この作品の産婆役である上野英信が岩波書店に『岩波新書』の一冊として刊行の依頼を持ちかけたところ、却下されている。

先ほど私は、「文芸的な」に傍点を振り、聞き書きにカッコを付したが、その理由は、これらの部分が実際には、極めて戦略的な見地に立って創出されたフィクションであったからである。

石牟礼はこの点について後に、水俣病に関しての運動体が生まれるための反状況を作るために、タテマエの組織論ではなく、魂や情念を表現する文体が必要であり、それが「きき書き」という形のフィクションであったと語っている（上野英信との対談『『苦海浄土』来し方行く末』）。そして、自分自身はその文体に身を隠しながら、運動へとつながるような状況の萌芽がぼつぼつ見えると、文体の中から出て行き、わからないようにそれをつないで行ったという。患者のモデルが語ったり、筆者が語ったりと、相互に変身しながら芝居のように作品世界を創っていくことで、運動の内的必然を白熱させていく方法は、「しぜんに意図して書いた」ものであるとも述べている。

興味深いのは、石牟礼自身もまた、こうしたフィクションとしての

「償い」を問う（金井）

「きき書き」という文体で『苦海浄土』を書き上げた後でなければ、『水俣市民会議』のような支援運動に入って行けなかったと語っている点である。石牟礼にとっては、患者にトランスして、フィクションとして患者の世界を生きたことなくしては、「水俣病問題」を戦うことは不可能であった。また、『苦海浄土』を読んでこの問題の抱える「のっぴきならなさ」に気付き、さまざまな形で運動に参加することになる人々にとっても、ゆき女や李太郎の爺さまや仙助老人の声を、患者自身の声として——それこそ、実際の患者に対面する以上にリアルに聞き届けるという文学的体験は、不可欠なものであった。

そして何よりも重要なことは、かつて同時代のドキュメンタリーとしては意味づけし得ない過剰なものとして映じた、このフィクションとしての「きき書き」の部分が、半世紀を経た今、いささかも時代遅れの感を与えないばかりか、優れた語り芸がまさにそうであるように、登場人物がまざまざと甦り立ち現れて、わたしたちに問いかけてくるところである。先に列挙した先行研究の数々が、三〇年余の隔たりを持ちつつ、この「きき書き」の文体を評価し続ける所以である。

患者たちに「語りかけられた」「声を聞いた」という文学的体験が、わたしに、わたしたちに、そして水俣病を知らない未来の人々に、かけがえない記憶を創るのである。

（四）動き出す患者像

——『苦海浄土』（第二部）に描かれた足跡——

初期の段階では、水俣病は伝染病と誤解されていたこともあり、患

者とその家族は、どの部落でも村八分の状態に置かれていた。病のため漁に出ることもできなくなり（漁に出たところで汚染された魚を獲っても売ることはできないのだが）、困窮して舟を手放した彼らにとって、自宅が病院よりほかに身の置き所はなかったのである。

第一部では、患者たちは自宅の朽ちかけた掘立小屋や、病院の水俣病特別病棟で、自分たちの話に耳を傾けてくれる「わたくし」に向かって問はず語りをするという設定がなされていた。実際、石牟礼は、一九五九年から友人であった市役所職員・赤崎寛の後について、患者の家を訪問し、彼らの話に耳を傾ける経験を無数に重ねていた。その時点では物書きとして知られる存在でもなく、主婦だった彼女は、保健婦や、市役所職員の愛人に間違われたりしながらも、次第に患者たちから「あねさん」と呼ばれ、徐々に受け入れられるようになる。

『苦海浄土』第一部が刊行された一九六九年、患者互助会は大きく動き出す。補償問題をめぐり、患者互助会は厚生省の幹旋に従おうという一任派と、「償い」の内容は自分たち自身が決めて要求したいという訴訟派とに分裂した。同年六月、患者互助会の訴訟派が熊本地裁にチッソを相手取った裁判を起こした際、会長の渡辺栄蔵が語った「今日ただいまから、私どもは、国家けんりよくに立ちむかうとでございます」ということは、水俣病の運動史において画期的なものであった。もし、彼自身や家族が水俣病に罹患しなかったら、荷車を引いて駄菓子を売ることを商売にし、穏やかで子ども好きな一庶民として生を全うしたはずの人物が、「国家けんりよくに立ちむかう」など

ということばを口にしなければならぬ事態がそこにはあった。

この「渡辺の爺ちゃん」の発言に象徴されるように、圧殺されるかに見えた患者とその家族たちは、敢然と動き出す。裁判所のある熊本へ通い始め、そして同年一月には、チッソの加害責任を直接追及するために、一株株主として大阪で開催されたチッソの株主総会に乗り込んでいく。このとき同様に一株株主として、千人近い支援者もまた会場に詰め掛けた。会場の周囲には、石牟礼の発案になる「怨」を染め抜いた吹流し（死旗（しにはた）と呼ばれた）七百人が風に翻り、総会に出席した患者とその家族一行は、揃いの白い巡礼姿で、死者を鎮魂するために御詠歌を朗唱した。このときの様子は、ニュース映像や土本典昭監督のドキュメンタリー映画によって全国に伝えられ、強烈な印象を与えることとなる。

「水俣病問題」を全国版にしたという点で、この株主総会のできごととは千載一遇の機会を逃さぬパフォーマンスであったが、ニュースやドキュメンタリー映画の白黒映像は、黒い吹流しや白い着物を、この世のものではないような不気味なものに印象づけたことも事実である。患者とその家族が何を考え、何を企図してこの行動に出たのか——あまりにも衝撃的な映像を前に、観た者は想像力を十分に働かせることができなくなるほどの衝撃があった。

動き出す患者像を追う『苦海浄土』第二部は、初出の連載が一九七〇年から八九年に及んでいる。石牟礼は、第二部を単行本としてまとめることに苦しみ、今回の完結版でようやく全容を明らかにすること

ができた。本稿では、細かな検討をする余地はないが、自立性をもって動き出した患者とその家族に関して、石牟礼は、第一部のように、全面的にフィクションとしての「きき書き」を展開することはしていない。第二部が、第一部で活躍した稀代の語り部・太一郎の爺さまの死から書き始められていることに、それは象徴されている。

第一部の時点からの生き残りである患者たちは、自身の声で、来し方のみならず、今後歩いていく方途についても語り出す。時に患者同士で葛藤し、また苦しい戦いの中に喜びや笑いさえ見出して、「黒子」である石牟礼たち支援者の思いがけない言動に出るのである。

石牟礼が第二部をまとめることに苦しんだ理由はさまざまであろうが、たとえば、一任派・山本亦由^{またよし}の荷ったものを、彼の内面に踏み込んで描くか否かという問題一つをとっても、答の出しにくい問題だっただろう。「渡辺の爺ちゃん」と同様に全くの庶民で、水俣病に出会わなければ厚生省などという場所に生涯縁のなかった人物が、結局は「渡辺の爺ちゃん」よりもほんの少し国を信じたことによって、官僚に説き伏せられて「償い」の中身を行政機関に一任し、運動を降りて行く。

第二部は、行動を起こさずさまな患者像に満ち溢れているが、しかしそれは国を信じた患者や家族、あるいは信じたいと願った者たちが、次々に運動から落とされていく、過酷な歳月を綴ることでもあったのだ。

(五) 直接対話に賭ける患者とその家族像、または狼煙^{のろし}に応じた人々の発見——『苦海浄土』（第三部）に描かれた「自主交渉」と支援の形——

第二部で描かれた大阪株主総会においても、患者とその家族、そして支援者たちは、行政や司法の仲介を経ずして、直接チッソにその責任を糺し、「償い」を求めている。第三部には、訴訟派が国の調停を拒否して、チッソの責任を司法の場で問う「水俣病裁判」を起こし、それに一九七三年、勝訴するまでの運動のうねりと、しかしその勝訴が患者の弁護団による極めて妥協的な内容に止まったことに納得しない、川本輝夫らの患者と家族のグループの、チッソとの自主交渉路線を歩むさまが描かれる。

部落にも居られん。水俣市にも居られん。国に行ってみても、国はあてにはならん。みんなチッソとグルちゅうことがわかった。やっぱりそんなら、ふり出しにもどって、本家本元のチッソ本社に、お世話になりゆこ。病人もひきとって養うてもらお。ああもう、ながい苦労じゃった。(第一部第三章)

こうした思いが一致して、患者とその家族はチッソ東京本社の前一年半に渡って座り込むところへ追い詰められていった。地元・水俣では、裁判結果を受け入れず、正面からチッソの責任を「償い」を求めてやまない患者とその家族に対して、「チッソをつぶして水俣市の

経済を傾けるつもりか」と市民から攻撃ビラが出回り、熊本県議會議員が「水俣病患者には二セ患者が多い」と発言するなど、郷里に彼らの居場所は失われつつあった。

期せずして彼らは、富と権力とが集中する都市・東京の玄関口である丸の内の地べたに陣取って、「かんじん」＝乞食の視点から、チッソと東京を眺めることになる。

「往た先の仮の宿をわが家になして暮らすのは舟人の性」＝「出かけた先のかりそめの宿泊先を我が家と考えて暮らすのは、漁師の性質」ということばが出てくるように、病身を押して地面に座り込んでいるうちに、彼らの中に、どこよりも東京のチッソ本社前が懐かしい、誰に遠慮することもなく寛ぎ得る「わが家」に感じられるくだりは、読者の誰もが予想だにしない展開であった。そうした暮らしを支えたのは、何百人にも上る支援者たち、ことに彼らの生活全般を、一緒に座り込みながら支援した若者たちである。

『苦海浄土』第三部には、「黒子」に徹して運動に固有名詞を残すこととなく献身した若者たちの姿が、愛情と尊敬の念を持って、克明に綴られていく。たとえば、第三章に、警察が座り込む支援の若者たちを排除しようとした際に、患者の佐藤武春が執行しようとする署長を止めようと水俣弁で懸命に説得し、最後に号泣して取りすがるくだりがある。

「あ、あ、よかですかあ！……署長さん！

わたしたちはですね、……あ、あのひとたちにですね、あのひとたち、のオ、お、おかげで……おかげですね、あの、若かひとたちのおかげで、こげんして、生まれてはじめて、東京に、東京にも、来られたですよお！……。

わ、わたしどん、患者だけ、銭もなかとに、どげんして東京に来るるですか。くわんじゃだけで、か、体も不自由かとに、どげんして、東京に来るるですか。ぜんぶ、あの衆たちのおかげですよお……。

あの、若か衆たちがですねえ、あ、あめの日も、風の日も、ほんなこて、寒か雨の日にも、地ん上に寝て、金ば集めてくれて、せんでんしてくれて、毎日毎日ですねえ、う、う……カンパば集めてくれて……。

こげん貧乏人ば、わたしどんがごたる貧乏人にですねえ、つくしてくれて、助けてくれて、……そのお陰で、わたしたちはこうして、やっと、東京に来たですよお……。

わが身は、あん衆たちはですねえ、食うや食わずやしととですよお、地ん上に寝て、この冬に。よか青年たちが……。

なして、あの衆たちば連れてはってとですか。誰がいままで、患者に、何十年……も、何十年……、署長さん、なあ、署長さん！なして……。

なんば悪かこつばしたですか、あの衆たちが、なあ、なあ、署長さん！悪かこつばしたとは、チッソじゃなですか、そげんじゃ

なかですか署長さん！

あの衆たちば、お願いですけどん、連れてはってかずに下さい、お願いします、お願いします……。

あの衆たちばムリに連れてはってきなはるなら、その前に、わたしどんば連れて行って下さい、こげんして……手向いせず、待ってととですけどん」

第一部のフィクションとしてのゆき女や李太郎の爺さまの「きき書き」とはまた異なった、素朴で切迫した現場報告の科白であるが、これもまた見事に「口説き」あるいは「触り」になり得ている。その場に立ち会った石牟礼自身が、患者と家族とを支え、そして彼女自身もまた、支援に集う若者たちから支えられているという確かな実感を持ち得たことで、この患者・佐藤武春の語りは、「わがごと」として生きられているからである。この時点で石牟礼は、長年の過労から片方の聴覚と片方の視覚を失っていたが、路上に坐って支援し／支援される体験の中で、新たに見え／聴こえてきたものは、計り知れないほどあったと推察される。

石牟礼は自主交渉が激化してチッソの工場や本社前に座り込みが展開される一九七一年に、「自分を焚く^ク」という随筆を書いている。運動のさなかにあつて、「しどろもどろの密かなる志を織りこみ埋めこみ、護摩を焚くかわりに」ことを焚き、そのことが立ち昇らなくなると、「自分を焚いた」と記している。「自分を焚く」という修辞は

穏やかではないが、自身を焼身する思いで、座り込みの場に存在したという謂いであろう。若者たちの中には、石牟礼のことばが、あるいは石牟礼自身が「焚かれて」立ち上る狼煙^{のろし}を見て、支援の輪に参画した者も数多い。その若者たちもまた、患者たちの路上生活を支えるために自分を「焚いた」のである。

と同時に、彼らはことばを生み出すこともしていた。路上でガリ版を使って、チッソの社名をパロディにした『日刊恥ッ素』という新聞を発行していたのである。このことも『苦海浄土』第三部には、予想外の喜ばしい生産の現場として記録されている。ちなみにこの、白熱した檄文・笑えないユーモア・生活日誌・激励の記事とが満載された『日刊恥ッ素』にも石牟礼は実にまめに執筆した。

患者とチッソ社長との直接の談判が、こうした下支えの上に奇跡のように成立していたこと——運動史の年表にすれば、折々の参加人数にしか換算されない支援の人々の息遣いを記すために、『苦海浄土』第三部は、かなりの頁を割いている。

社長との直接対決の中で、患者・浜元フミヨは「チッソは水俣で最後まで水俣病に責任をとれ」「患者の療養を保証せよ」といった「償い」を要求した書類を示して、社長の印判を迫る折、四二歳になるまでの自分史を語った。『苦海浄土』はそれを書き留める。彼女はチッソの社長に、両親を劇症の水俣病で死なせ、思う人との縁も諦めて、半身不随になりつつある弟の世話をしなから、自身もこの病を病んでいる現実を、むしろ親しい人に語りかけるようにことばを選んで語り

かける。大阪の株主総会の時点では、「両親^{ふたぢやう}ぞお、両親^{ふたぢやう}あ」と叫んで二階席の欄干に駆け上ることしかできなかった彼女が、一家全員の命のかけがえなさと、何よりも彼女自身が幸せな人生を送る権利を持ちえたはずであることに情誼を尽くして言及しているのである。

それは、石牟礼をはじめ支援の人々が「自分を焚いて」明らかにしようとしてきた、患者とその家族のかけがえのない人権が、当事者の口から語られる瞬間でもあった。

環境倫理学の立場から、鬼頭秀一は「環境破壊をめぐる言説の現場から」¹⁸において、水俣病問題にアプローチする方途の一つとして、被害者の生の個性、総体を捉える方法論としての「聴く」ことに着目している。

「聴く」という作業が、その人間の全存在を受けとめるということになる。書き留め、記録し続けるということもその延長にある。ライフヒストリーを聞き取るということも同じ流れである。そこには、淘汰されるべき人間、被害にあった人間が、全体としての「被害」を「語る」という作業によって、そのままの形で納得するといふ過程がある。土本典昭や佐藤真が映像で記録してきたことや、石牟礼が「語り部」として、文学の形で表現しようとしたこともそこにつながる営為である。

さきほどの佐藤武春の科白は、警察署長に向けられていると同時に、

いままさに拘引されようとしている支援者の若者たちやその場に立ち尽くして見守る石牟礼道子にも向けられている。つまり、確かに聴き手がいる時空において発せられていることばであることを見逃してはならない。事態は限りなく悲惨だが、その言葉は受け止められており、かつ、外の世界に届けられる可能性を持っている。その可能性を保証するのは、「聴き手」にして「語り手」でもある石牟礼であり、第一部の段階では影も形も見えなかったが第三部においては増集している支援の若者たちの存在であり、そして、語ることばだけではなく、書くことばをも身につけつつあった、川本輝夫ら患者仲間であった。

川本輝夫は、さまざまな裁判と並走してチッソとの自主交渉を続ける一九七五年五月、創刊した季刊誌『不知火』において、「我が水俣病」と題する記事の連載を始めた。これは、一九六九年に刊行された『苦海浄土——わが水俣病——』の、患者および家族からの返歌としての意味合いがこめられているであろうことは想像に難くない。

川本は「水俣病とは何か」を自問した答を次のように記している。

日本の資本主義社会創生期の頃に、九州の一寒村水俣に野口遵という超人間無視、人間蔑視、「人間は牛馬と思つて使へ」の思想の持主が日本窒素肥料株式会社を創設した歴史の中から、水俣病の歴史が始まり、現在に至っている。いつの世から言われ始めたのかは知らないが、人類は自然を征服し制御し得るという奢った考え方に立ち、水俣の人間支配と自然支配の歴史は、汚悪水、水銀タレ流し

による水俣病汚染がひいては不知火海汚染に広がり、とてつもない人類未知の不幸の病の世界に踏み込んだ。その人類未知の病、不治の病、業病が「我が水俣病」である。

『苦海浄土』を執筆する中で、石牟礼道子が水俣病を「わたくしごと」として生きようとしたベクトルとは逆に、川本は「わたくしごと」としての水俣病を、人類の問題へと広げていく。佐藤武春の傍らにいてその訴えを聴き取った患者の一人である川本輝夫は、上記のような硬質な書きことばを発信するに至った主体に成長していた。

『苦海浄土』の患者やその家族像を第一部のそれだけに止め置くのではなく、「聴き手」を得ることを力に、自らを語り、書くことへと進み出る多様な群像を発見することの中に、わたしたちは「終わらない」水俣病を同時代の人間として見据え、抱えて生きるための啓示を得ることができるのではないだろうか。

注

- 1 藤原書店版『石牟礼道子全集』の第一巻と第二巻が、第二巻に第三部が収録された。いずれも二〇〇四年四月三〇日刊行。その際、第一巻にはルビと方言の説明が、第二巻と第三巻には大幅な加筆を含む改稿がなされた。
- 2 一九六〇年一月に「奇病」が『サークル村』に掲載される際に、「水俣湾漁民のルポルタージュ」という表題が付されていた。
- 3 「水俣病の公式確認」について、水俣病公式確認五十年誌編集委員会編『水俣病の50年——今それぞれに思うこと』(二〇〇六、海鳥社)に収録された「水俣病五〇年史年表」では、「一九五六年(昭和三十一年)五月一日、原因の分からない病(水俣病)の確認。(水俣病の公式確認)」という記載があり、「チッソ付属病院から水俣保健所に、原因不明の脳症状を呈する患者四人が入院したことが報告され

たことにより初めて公式に確認された。この年の末までに五十四人の患者が確認され、そのうち十七人はすでに死亡していた。最初の患者は昭和二十八年に発病した」と説明されている。

- 4 全集は二〇〇九年一月現在で第十四巻まで配本が進行し、詩歌句集、新作能と古謡、高群逸枝の評伝、そして別巻の自伝を残すのみになっている。
- 5 『苦海浄土』第二部「神々の村」は、「辺境」に一九七〇年から一九八九年にかけて連載されたものに大幅な改稿を加えたものである。
- 6 井上洋子「ゆき女書き書き」成立考——石牟礼道子とフェミニズム——(佐藤泰正編『フェミニズムあるいはフェミニズム以後』一九九一、笠間書院)
- 7 黒古一夫「へ共苦の思想と文学——水俣病と石牟礼道子」(一九九二・六、『社会文学』)
- 8 川村湊「風を読む 水に書く」潮の橋の上で——石牟礼道子論」(一九九七・六、『群像』)
- 9 木村信子「時間軸を超えて——石牟礼道子とジュリア・クリステヴァ——」(一九九二・二、『文芸研究 明治大学文学部紀要』)
- 10 岩淵宏子「表象としての『水俣病』——石牟礼道子の世界——」(二〇〇一・六、『社会文学』)
- 11 矢倉真宏「ルポルタージュからノンフィクションへ——石牟礼道子『苦海浄土』をその原点として——」(二〇〇四・三、『潮』)
- 12 石牟礼道子「絶対負荷をになうひとびとに」(縮刷版・告発)、『一九七二・九』相思社作成「水俣病認定審査関連統計資料」
- 13 <http://www.soshisha.org/kanja/youkei.htm> 参照。
- 14 慶田勝彦「水俣の民族史的近代——聞き届けられた声」の行方」(丸山定巳・田口宏昭・田中雄次・慶田勝彦編『水俣の経験と記憶』二〇〇四、熊本出版文化会館)
- 15 詳細については、拙稿「方言で朗読すること——石牟礼道子『苦海浄土』を読む——」(大津雄一・金井景子編『声の力と国語教育』二〇〇七、学文社)を参照のこと。
- 16 上野英信との対談『苦海浄土』来し方行く末」(一九七三・一一、『潮』)
- 17 「自分を焚く」(一九七二・七、『展望』)
- 18 鬼頭秀一「環境破壊をめぐる言説の現場から」(岩波講座 哲学8 生命/環境の哲学』二〇〇九、岩波書店)